



2013.5.1

5月 ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

初めての集団生活を経験する子どもたちにとっては、楽しみにしていた幼稚園での生活も、おもちゃは自分ひとりの自由には出来ず、また担任の先生を独占できないという現実気づき、少し気持ちが落ち込んでいる時期かも知れません。また、集団生活をする上でのルールやマナーもあるわけですが、幼稚園という環境で初めてそのことを実感して戸惑っている子どももいるかも知れません。そして、このようなルールなども、その意味も分からずに、ただ従わせられているだけでは、子どもたちには不満だけが残ることとなります。また、常に教諭から行動を指示され管理されているだけでは、子どもたちは教諭からの指示を待ち、それに従うことが大人から認められる方法であると理解し、本当に自分が好きな遊びを見つけることも出来ず、友だちとの自由な関わりも広がりません。

幼児期の子どもには、その意味も理解しないで規則やルールを守らされるのではなく、他者との関わりを通して、自分の気持ちだけでなく、相手の気持ちを感じて受け入れる経験が大切です。つまり、他者との関わり方やマナーは、時には悲しい思いをしたり、また相手を怒らせてしまったりといった、様々な気持ちを経験しながらでないと身につかないことを理解する必要があります。

大人が、大人の価値観で幼稚園という環境を管理しているのであれば、表面的には問題なく時間は経過するのもかも知れませんが、それでは子ども自身が成長に必要な様々な感情体験をする機会が奪われるだけでなく、子どもたちは幼稚園の本当の楽しみを見出すことは出来ないのでしょうか。もちろん指示された通りに動くことが必要ないわけではないのですが、幼児期からそのように扱われているのであれば、興味関心から生まれる意欲を自らが高めることもないでしょうし、自分自身の感情や意志を表現する経験も損なわれることとなります。自分を表現し、他者を受け入れることが苦手な若者が増えている現状も、このような幼児期からの体験が不足していることが一番の原因のように思われます。子どもが成長するためには、子ども同士が自由に関わり、悲しい思いをしたりさせたりしながらも、やっぱり友だちと遊ぶのが一番楽しいということを実感できる子どもの世界が大切なのです。地域社会の中で異年齢の子ども同士が自由に過ごす環境が消失しつつある現代においては、幼稚園だけがこのような体験を確保できる場であることを忘れないでいたいと思います。

「伸ばそうとするばかりでなく、伸びるのを待っているばかりでなく、
現に目の前でこうまで伸びゆくのを驚く心。それが五月の心」（倉橋惣三『育ての心』）

年主題 「あふれる愛」

5月主題 「感じる」

聖句 “わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。”
（ヨハネの手紙 4章 19節）